Wat Pā Däng 派の成立に関する小考（2）

古　山　健　一

1．はじめに

昨年筆者は、本論集において「Wat Pā Däng 派の成立に関する小考」と題する論考［古山 2019.］を寄稿した。本稿は表題の如くその続編であり、当然のことながら論考の主題は変わらない。Wat Pā Däng 派[(1)] 内において編述されたと考えられる史書の記述から、同派の中で語られてきた同派成立についての同派の認識や、先行のスリランカ系僧派である Wat Suan Dòk 派に対して後行の Wat Pā Däng 派がなした自派の正統性 ―換言すれば同派の “*Sinhalese school*” 性―に関する主張について明らかにする。ここでは特に、同派内で編述された史書の 1 つである Wat Pā Däng 版 *Mūlasāsanā*（*ตำนานมูลศาสนา* ฉบับวัดปาแดง、北部タイ語。※ 以下 MS.CP と略記）の第 11 章［MS[CP/T].pp.12-14；Cf. MS[CP/E].p.86-88］の語りのうち、その前半部分に焦点を当てて考察を加える。

この MS.CP 第 11 章は、Mahāñāṇagambhīra 師が渡錫するに至った経緯を語る章である。後にまた触れることになるが、同章は内容的に前半部と後半部の 2 つの部分に分けることができる。前半部は、Mahāñāṇagambhīra 師の出家からスリランカ渡航前までの行状を語っている。後半部の内容は、チエンマイ僧 Siddhanta 師らがスリランカ僧から Wat Suan Dòk 派の授具足戒式が無効であると指弾された事件の報告を受けて、同派の僧長である Dhammakitti 師が弟子である Mahāñāṇagambhīra 師のスリランカ派遣を決定した、という話である。

前稿においても MS.CP 第 11 章の語りに考察を加えているが、そこでは後半部分のみをとりあげ、前半部分にはまったく言及しなかった。その理由は、前稿では、Wat Pā Däng 派の成立に係る同派の認識の核心を抉り出すのに、同派の 2 つの史書、*Jinakālamālī*（パーリ語。※ 以下 Jkm と略記）と MS.CP における語りの共通的部分に着目してゆくという手法を採ったからである。Jkm には、第 11 章の前半部分の内容に照応していると見做しうる記述がない。ゆえに、紙幅の

都合も勘案して、敢えて触れることはしなかった次第である。

然しながら、Jkm には対応部がなくとも、Wat Pā Däng 派の成立事情について語っている箇所であるから、この僧派の成立事情についての同派の認識なるものを論究する上では、どこかで一考に付しておかねばならない。斯様なことから本稿でこれをとりあげてみることとした。これによって前稿を多少なりとも補完し、その考察を十全に近づけられればと願うところである。

この小考もまた研究ノートに類するものであり、ラーン・ナー仏教史のうちの些細な断面を切り取って戯れるが如きものに過ぎないが、該地域の仏教理解を深めるのに多少なりとも役立つことができるならば幸いである。相も変わらず浅学菲才の物柄たる筆者の論考ゆえ、不備不足の点は多々あるものと危惧するが、斯様なところについては識者諸賢のご批判とご叱正を乞いたい。

２．MS.CP とその第 11 章前半部

先ず、MS.CP 第 11 章 [2] の語りについて考察する前に、その理解に深く関わるであろう MS.CP という文献そのものの性質から述べてみたい。

“*Mūlasāsanā*（ตำนานมูลศาสนา）” なる表題を有するラーン・ナー地域撰述の仏教史書は単一ではなく、複数のテキストが存在している [3]。それらの諸テキストは大概 3 つの系統に大別することができる。即ち、①チエンマイの Wat Suan Dòk 派系（ฝ่ายวัดสวนดอก เชียงใหม่）、②ミャンマー・チエントゥンの Wat Pā Däng 派系（ฝ่ายวัดป่าแดง เชียงตุง）、③同チエントゥンの Wat Yāng Kuang 派系（ฝ่ายวัดยางควง เชียงตุง）の 3 種である [4]。

なお、チエントゥンの Wat Yāng Kuang 派というのは、後述するように、チエンマイから伝わった Wat Suan Dòk 派の法灯を継承する僧派と言えるから、③は①と同じ系統に括ることもできるであろう。

これからその第 11 章を考察しようとしている “MS.CP” 即ち Wat Pā Däng 版 *Mūlasāsanā*（ตำนานมูลศาสนา ฉบับวัดป่าแดง）というのは、上に示した 3 系統の名目を見て即座に気が付くことであろうが、②のチエントゥンの Wat Pā Däng 派系のテキストである。そして、このチエントゥンの Wat Pā Däng 派とは何かと言うと、Mahāñāṇagambhīra 師がまだ存命中であった C.S.806 年（A.D.1444 年頃）に、チエントゥン国王の要請によりその弟子である Somacitta 師ら 5 名の僧がチエントゥンに派遣され [5]、C.S.810 年（A.D.1448 年頃）に同地にあった “Wat Pā Däng” とい

う名の寺院の布薩堂で授具足戒式を開始したことで生まれた僧派である（Cf. MS.CP 第 21 章：MS[CP/T]. pp.23ff.；MS[CP/E]. pp.100ff.）。ゆえに、チエンマイの Wat Pā Däng 派の分脈で支系に当たるものということになる。

ところでチエントゥンには、クーナー王（พญากือนา）の治世期に当たるが、チエンマイに Sumana 師が招聘されて Wat Suan Dòk 派が成立した草創期に、この僧派の仏教が伝わっており[6]、Somacitta 師らが派遣されて来た時には既に一定の教勢を有していたようである。Somacitta 師らは、チエントゥンに到着してほどなく Wat Pā Däng の布薩堂で授具足戒式を始めたのであるが、Wat Yāng Kuang の僧たちはそこでの再授具足を拒絶した。この寺の僧たちは、①自分らは Sumana 長老から字音（อักขระ）を学び取る方式に従っているから Suan Dòk の僧徒であり、②またチエンマイの Wat Suan Dòk に住する Buddhagambhīra 長老（※同寺第 5 代住持と考えられる）[7] を頭領としている、と主張して、Somacitta 師らとは一線を画す態度を取り、独立を維持したのであった。この一党が先述した「Wat Yāng Kuang 派」と呼ばれる僧派となり、以後は Wat Pā Däng 派と激しく反目し諍論を巻き起こしてゆく。そうした事件のことは、MS.CP においてチエントゥンの Wat Pā Däng 派の歴史を語る第 21 章以下の中で縷々語られている。

なお、Somacitta 師らが始めた授具足戒式で再授具足を受けた ― 即ち Wat Pā Däng 派に加入した ― のは、Wat Luang Chiang Lae（วัดหลวงเชียงแล）や Wat Yāng Kham（วัดยางกำ）などに住まう僧らで、彼らはソムデット（สมเด็จ）位の高僧 Indamunī 師の弟子らであったと言う（Cf. MS.CP 第 21 章）。

この Indamunī 師というのは、タイ南部・中部地域にスリランカ仏教をもたらした Sudhammajāta 師（สมเด็จราชมุลีสุธัมมชาโต、※ スリランカ Asokārāma の僧）の弟子であり[8]、同門の Dhammaraṃsī 師とともに、チエンマイのクーナー王の協力を得てチエントゥンにスリランカ仏教を広めた、と言う。両師は国王の篤信を得て手厚い支援を受けつつ、Indamunī 師は Wat Luang Chiang Lae に住し、Dhammaraṃsī 師は Wat Yāng Kham に住して授具足戒式を行った。Indamunī 師はソムデット（สมเด็จ）位に叙せられ、Dhammaraṃsī 師には教主（สวามี < Skt. svāmin）の地位が贈られ、すぐさまかなりの教勢を築いたようである（Cf. MS.CP 第 9 章：MS[CP/T]. pp.9ff.；MS[CP/E]. pp.83ff.）。

この Indamunī 師らの弟子たちは、Wat Yāng Kuang の僧たちの如く拒絶反応は示さなかった。彼らはすんなりと再授具足に応じた。その理由は、Somacitta 師らの用いる字音（อักขระ）と経・羯磨（สูตกัมม์ = P. sutta-kamma）が、ヨーティヤー（ア

ユタヤ）のソムデット僧である Dhammagambhīra 師のと異なっていないから[9]、ということであったらしい［MS[CP/T].p.25；Cf. MS[CP/E].p.101］。斯くして Somacitta 師らのもとで 1259 僧が再授具足を受けて、2 つの派は単一になったと言う。Wat Pā Däng 派はチエントゥンにおいて早々に大きな僧派となった。

既述の如く、チエントゥンの Wat Pā Däng 派というのは、その形成の当初から Wat Suan Dòk 派系の Wat Yāng Kuang の僧らとの摩擦を抱えていた。そしてこの対立関係はその後 60 年ほど続くことになる。Wat Pā Däng 派は、Wat Suan Dòk 派系僧派と熾烈な対立を繰り広げながらチエントゥンに展開した僧派なのである。斯様な点から、チエントゥンの Wat Pā Däng 派には、Wat Suan Dòk 派への対抗心が、もしかするとチエンマイの母派よりも強かったのではないかということも想像されよう。

C.S.869 年（A.D.1507 年頃）には、Wat Pā Däng 派と Wat Yāng Kuang 派との間に大きな諍論が起きている。Wat Chiang Yün（วัดเชียงยืน）での Vessantara-jātaka の説法会において、Wat Yāng Kuang 派の僧は、同じ場に居合わせることになった Wat Pā Däng 派の僧らに対して、① Mahāñāṇagambhīra 師は自らの和尚（upajjhāya）即ち Wat Suan Dòk 派の Dhammakitti 師に反逆した者である、②チエンマイの王によって都から放逐された、③スリランカから帰って来ては僧団分裂を引き起こした、と言って口撃したのが事件の発端である［MS[CP/T].pp.29-30；Cf. MS[CP/E].pp.106-107］。Wat Pā Däng 派というのは Wat Suan Dòk 派を分裂させて出ていった破和合僧の輩ではないか、と罵ったことからこの諍論が始まったのである。

Wat Yāng Kuang 派の僧らは、Mahāñāṇagambhīra 師の行状を、師弟の礼儀を踏み躙り、もといた Wat Suan Dòk 派の非律性を主張して同派の一部の比丘らを誘引し別途の（しかも流儀に違いのある）僧団儀式（不共羯磨）を始めたものと受け止めていたのであろう。Somacitta 師からの再受具足を拒絶した際の言葉から知られるように、Wat Yāng Kuang の僧らはチエンマイ Wat Suan Dòk 派への帰属意識や忠誠心が高い。ゆえに、その経緯はどうであれ、Wat Suan Dòk 派と袂を分かって異なる流儀の僧団儀式を始めた、というのは許し難いことであったと思われる。Mahāñāṇagambhīra 師が仏教に異議を唱えた、などという言い方もしているので、外道の如き者とも見ていたようである。Hans Penth は両派の分立を「破僧」と呼んだ者は誰もいないようであると述べている［Penth2004. p.77］が、このような「破和合僧の輩」との批判は、少なくともチエントゥンでは早くから燻っていたのではないだろうか。C.S.869 年になって言い出した話ではなかろう。

このC.S.869年に起きた事件は、両派の僧によるその場の罵り合い程度では終わらず大事件に発展した。

チエントゥンにおけるこの２つの僧派の諍論が収束したのはC.S.871年（A.D.1509年頃）のことであった。チエントゥンの領主Āditta王（พระยาอาทิต）が介入した結果、Wat Yāng Kuang派がWat Pā Däng派で再授具足を受けることに同意し、Wat Pā Däng派に合流することで決着がついた。C.S.870年の雨安居期間のことであるが、Wat Yāng Kuang派の僧たちは長老僧を礼拝しないという傲慢不遜な態度をとったため（※これも諍論事件と関係しているのだろう）、Āditta王は、Wat Yāng Kuang派の僧徒を快く思わないようになり、両僧派をWat Pā Däng派に1本化する ― つまりWat Yāng Kuang派を解体する ― ことでこの争いを終わらせる方針をとることに意を決していた［MS[CP/T].p.31；Cf. MS[CP/E].p.109］。ゆえに、両僧派を和解させるという道は採らず[10]、斯様なかたちで問題の決着をつけたのである。かくしてWat Pā Däng派は一応この諍論の「勝者」となった。

この勝利の出来事はMS.CP自体が語っているわけであるが、そうであれば当然、MS.CPの編述というのはこの出来事の後ということになる。実際、いま見ているこのMS.CPの編述は、かの出来事から100年余を過ぎたA.D.17cに入ってからのことと考えられる[11]のだが、MS.CPというのは、「勝者」という立場で、しかも当該の諍論事件からかなり時間が経ってから、Wat Suan Dòk派系僧派を凌駕した勝利の栄光を語っている史書なのである。言わば「勝者の歴史」を物語る文献なのである。ゆえに、MS.CPが「敗者」たるWat Yāng Kuang派とその母体であるWat Suan Dòk派のことをどれだけ公平性や客観性を保って語っているのかは定かでなく、派執に塗れた自讃毀他的語りを恣にしている可能性のあることは常に念頭に置いて読まなければならないと言えよう。

例えば、前稿（p.255）でも述べているが、チエントゥンのWat Pā Däng派で編まれたMS.CPには、Wat Suan Dòk派の祖Sumana師の師匠であるUdumbara師のことを「非律の比丘」や「偽比丘」と思わせて殊更に貶めようとしているのではないかと読める語りがある。チエンマイのWat Pā Däng派の僧が書いたJkmでは、Udumbara師の仏教の“*Sinhalese school*”性を認めない語り口はあるものの、MS.CPのような語りは特段見当たらない。無論Wat Suan Dòk派の*Mūlasāsanā*（MS.）にはそのような語りはなく、スリランカの立派な高僧として語られている。

MS.CPには、同じ人物や出来事などについて、Jkmとは異なる話をしてい

る場合が多々ある。上の例もその１つに挙げられる。チエントゥンに展開した Wat Pā Däng 派の系譜内で言い広められていた“*local legend*”に類する自派伝承というのもあるであろうから、斯様なものが織り込められた結果、Jkm とは差異が生じるということはあるだろう。とは言え、上の例の場合は Wat Suan Dòk 派への貶謗の度合いが強まっていることが看取されうるので、MS.CP が「勝者の歴史」であるということに由来した派執的主張の如きものと解するのが妥当ではないかと思う。特に他意のない在地の伝承と見做すことは難しいのではないか。

MS.CP 第 11 章の語りは、Mahāñāṇagambhīra 師が Wat Suan Dòk 派の僧であった時代の話である。ここにもチエントゥンの Wat Pā Däng 派にとっての「敗者」である Wat Suan Dòk 派への言及がある。よって、そこには「勝者の歴史」たる MS.CP ならではの派執的性格が語りの中に滲み出ている可能性は否めないであろう。この点は注意しておいて余りあると考える。

ところで、先ほど Wat Pā Däng 派は諍論の「勝者」となったと述べたが、それは、Wat Pā Däng 派を「破和合僧の輩」と難詰していた僧派が、この僧派を嫌った国王の介入によって消滅させられたからであり、MS.CP の語りにおいては、チエントゥンの Wat Pā Däng 派の僧が自ら釈明反論して Wat Yāng Kuang 派の僧をやりこめようとしたという形跡がどこにもない。Vessantara-jātaka の説法会で Wat Yāng Kuang 派の僧から難詰された後、これを不快に思った Wat Pā Däng 派の僧は、両派の僧を集めた討議の場を設けるよう Āditta 王に訴えた。同王は、Wat Mai Hua Kuang（วัดใหม่หัวช่วง）に両派の僧を集め、高官役人の列席のもと討議を行わせた。そこでは先ず、Wat Yāng Kuang 派の僧が Mahāñāṇagambhīra 師への糾弾の言葉を述べるのであるが、その直後に突然「Wat Phra Sing（วัดพระสิงห์）の大僧団王（mahāsaṅgharāja）」なる僧が割って入って諭誡（อุปเทศ = P. upadesa）を始め、ホンサーワディー（ミャンマー）での故事に倣うとして、呪術的な神判の如き手法 (12) によって Mahāñāṇagambhīra 師が「反逆者」であるのかどうかを判定しようではないか、と提案する。これに同席の司法官及び国王、両派の僧が同意したため、この判定法によって白黒が決められることになった。結果は「白」で、Mahāñāṇagambhīra 師には、ついては Wat Pā Däng 派にも、問題はないということとなった。Wat Pā Däng 派の僧は、この結果に乗じて、今後 Wat Yāng Kuang 派の僧が斯様に難詰することがないように僧派を１本化するよう Āditta 王に要求したのだが、この時点では、Āditta 王は Wat Yāng Kuang

派の僧に謝罪を命じた程度の対応しかしなかった、と言う（※ 僧派 1 本化の意を固めるのは先述の C.S.870 年の出来事の後である）［MS[CP/T].pp.29-30；Cf. MS[CP/E].pp.107-108］。

この話も、事件から 100 年余を過ぎた頃に編まれたテキストの語りであり、「勝者の歴史」たる MS.CP の語りであるから、どれだけ事実をそのままに伝えているのかは定かでないのだが、その詮索はひとまず措くとして、この出来事の語りを読んだだけでは、なぜ Mahāñāṇagambhīra 師や Wat Pā Däng 派に問題がないという結果がもたらされたのかということは、まったく分からないかたちになっている。まさに神秘のヴェールに包まれてしまっているのである。

それでは、この「勝者の歴史」はそのことを語っていないのかというと、実は、本稿で論考の対象としている MS.CP 第 11 章がその部分の語りの半分を担っている。残りはチエンマイ帰着後のことを語る第 18 章の冒頭部 (13) が担っている。この 2 つの箇所の語りの内容を併せると、Wat Pā Däng 派の成立は Mahāñāṇagambhīra 師の師匠である Wat Suan Dòk 派僧長 Dhammakitti 師の指示と同意のもとで進められたこと、Mahāñāṇagambhīra 師は師匠に反逆したわけでも、破僧をなしたわけでもないということが陰に陽に知られるようになっている。換言すれば、これらの語りを知らないと、当該の神秘的な白黒判じで Wat Pā Däng 派が「白」となった所以は分からない絡繰りになっているのである。受け止め方によっては、Wat Yāng Kuang 派の僧らがなした批判への回答が、これらの箇所に示されているかのようにさえ見えるだろう。とにかく、MS.CP の中では、ここに含まれる第 11 章前半部の語りというのは、そこからかなり離れた C.S.869 年に起きた諍論事件の語りと密接な繋がりを有している。たんなる Mahāñāṇagambhīra 師の伝記ではない。

最後に 1 つ付言しておきたいが、MS.CP では Wat Pā Däng 派の成立経緯に問題がなかったという話になっているが、実際にそう言い切れるものなのかどうかは、改めてつぶさに考察されなければならないだろう。ラーン・ナー仏教史研究における 1 つの大きな課題であると思う。

筆者は、目下はまだ想像の域を出ない段階ではあるが、チエンマイの Wat Pā Däng 派には「スリランカ直伝」の僧団儀式法と戒統を有するという大きなテーラヴァーダ仏教的権威 ― 僧派の正統性でもある ― があったものの、その成立経緯には、もしかすると「反逆」や「破僧」とも見紛われかねない、何らかの “*Grey zone*” とでも呼びうる部分があったのではないかと思っている。斯様に思う理由については次節の中で述べたいが、そうした曖昧模糊と見える部分が、チエ

ントゥンにおいて熾烈な諍論を起こさしめたものと考えている。

３．MS.CP 第 11 章前半部の語り

本題の MS.CP 第 11 章前半部［MS[CP/T].pp.12-13；Cf. MS[CP/E].p.86-87］の内容の考察に入ろう。

この第 11 章前半部であるが、本稿第 1 節でも触れたように、MS.CP よりも撰述時期の早い Jkm には、その内容に照応していると見做しうる記述がない。Jkm では、Wat Pā Däng 派成立の重要な立役者であった僧の名を “Mahādhammagambhīra” としている [(14)] が、その第 23 章［Jkm.pp.91-95］において、C.S.785 年（A.D.1423 年頃）に開かれたスリランカ渡航を決議した大長老会議の記事に突如として登場し、それ以前の行状や素性を一切語っていない。自派の極めて重要な人物であるのにもかかわらずである。Jkm-Ind. の ‘*Preface*’ に述べられている如く Jkm の現存テキストには種々の問題が指摘されており（※ 古山 2017. において要約してある）、この状況を説明するのは容易くないが、とにかく Jkm の現存テキストにはまったく言及がないのである。

MS.CP 第 11 章は、MS[CP/T]. では「ソムデット位の王師である Dhammakitti 師の夢見（ความฝันของสมเด็จราชครูมหาธัมมกิตติ）」という章題が付されている。これは、この章の最初の語りが Dhammakitti 師の霊夢譚に始まることから斯様に題が付されただけのことで、本章全体を包括した章題ではない。前半部だけでも幾つかの話から成っている。それは、① Dhammakitti 師の霊夢、② Mahāñāṇagambhīra 師の出家、③沙弥時代（13 ～ 21 歳）の勉学、④授具足後の教学講師、⑤ 3 年間の思惟と Wat Suan Dòk 派の問題点、⑥ Dhammakitti 師への報告、⑦ Wat Bān Lān Kum Kām（วัดบ้านลานกุมกาม）への入寺、の 7 話に分けることができる。以下、この順にその内容を見てゆく。

その前に先ず Dhammakitti 師について述べておきたい。

本章の直前にある第 10 章［MS[CP/T].p.12；Cf. MS[CP/E].p.85-86］は、チエンマイ Wat Suan Dòk の歴住リストになっているのであるが、その終末部に霊夢を見た頃の Dhammakitti 師のことが言及されている [(15)]。それによると、Mahānandapañña（= Nandapañña）師 [(16)] が Wat Suan Dòk の第 3 代住職に就いていた時期 [(17)] に、Mahādhammakitti（= Dhammakitti）師は、ソムデット位の王師（สมเด็จราชครู）に叙任されていた耆宿たる全僧団の首座（เคล้าแก่สังฆะทังมวล）であり、チ

エンマイ都の南にある Wat Nantārām（วัดนันทาราม、Nandārāma）に住していた、と言う。Wat Suan Dòk の住持ではなかったが「僧長」の地位[18]にある大長老であった。

ところで筆者（古山）は、前節で、Wat Pā Däng 派の成立経緯には “*Grey zone*” とでも呼びうる部分があったのではないかと述べたが、斯様に思うのは、この当時の Wat Suan Dòk 派内の状況による。Wat Suan Dòk 派には、かつて Sumana 師が住して戒統を広めた言わば「本山」とも言うべき Wat Suan Dòk の住持として Nandapañña 師がいたが、この他に、もしかするとチエンマイの僧界全体にも影響力を行使できたかもしれない大長老比丘の Dhammakitti 師がいた。つまり、派内の僧らに権威を及ぼしうる高徳が 2 人いたのである[19]。こうした 1 種の「二重構造」の如き状況 ― これが “*Grey zone*” とでも呼びうる部分に相当すると考えるのであるが ― は、両高僧の職掌には各々相違があったではあろうが、誰の指図を重んじるかにより派内の僧を 2 つに分断し、Sumana 師の猊座を継ぐ Wat Suan Dòk 住持の指図で動く僧のグループと、Dhammakitti 師の指図で動く僧のグループを生み出していたのではなかろうかと推量する。つまり、当時この僧派は船長が 2 人いる船のようであったということである。MS.CP 第 11 章では、僧団儀式執行法に問題があるとの報告を受けた Dhammakitti 師の指示により、弟子の Mahāñāṇagambhīra 師らがスリランカに派遣された。また、MS.CP 第 18 章の冒頭部によれば、Wat Pā Däng 派は、この Dhammakitti 師の承認と呼びかけによって、同派の僧らがチエンマイ帰還後の Mahāñāṇagambhīra 師のもとで再授具足を受けたことで成立した、ということになっている。これが事実であると仮定して、そこに筆者の推量を重ねれば、Wat Pā Däng 派というのは、同派の僧団儀式執行法の「改革」に理解を示した Dhammakitti 師の後押しがあったからこそ生まれたと言え、これに参画した Wat Suan Dòk 派内の僧には「反逆」や「破僧」といった意識は微塵もなく、僧長の指図にしたがったまでのことに過ぎなかったであろう。他方で、Wat Suan Dòk 住持の立場がどうであったかはよく分からないが、仮にこの動きを容認し難いと考えていたのであれば、同住持を「頭領」と仰ぐ僧らの目には「破僧」の如き暴挙としか映じなかったことであろう。

話を第 11 章のことに戻すと、この Dhammakitti 師は、ある夜に霊夢をみたと言う。それは、東から白象がやって来て、寺に入って法蔵（仏典）を食べ尽くすと、その両牙で Dhammakitti 師を持ち上げて岩の上にのせ、鼻で蓮華をとると大きく嘶き、北方へ去った、という夢であった。翌日の午前中に、Dhammakitti

師がこの不思議な夢のことを弟子たちに話すと、長老比丘らは、大好運の兆しである、とその夢を判じた。

これに続く②では、Mahāñāṇagambhīra 師の出家のことが語られる。①で語られていた霊夢というのは、Mahāñāṇagambhīra 師が弟子となることの前触れであったということになる。夢をみた翌日の正午近くの頃のこと、チエンマイ都に住まう Phantā Säng（พันตาแสง）という名の大優婆塞が、Sāmcit（สามจิตต์）という名の 13 歳の息子を連れて、Wat Nantārām にやって来た。すると、大優婆塞は息子を出家させてくれるようにと願い出た。Dhammakitti 師は、これを認め、説法の後に Sāmcit を沙弥として出家させ、“Ñāṇagambhīra” との僧名を授与した、と言う。高僧伝にしばしば見られるドラマチックな出家譚の語り口となっているが、斯くして Mahāñāṇagambhīra 師は Dhammakitti 師の弟子となった。

③では、Ñāṇagambhīra 沙弥の勉学のことが語られる。沙弥は、授具足を受けた 21 歳までの 8 年間、三蔵を学び、パーリ語の註釈 [20] とともに、*Rūpasaddā*、*Bhedaniruttisaddā*、*Nayādhasaddā*、*Samuhanikhādanasaddā* という文法の専門書（คัมภีร์สัททา、※ いずれもカッチャーヤナ学派系のパーリ語文典のような気がするが、目下のところ不詳）をも習得した、と言う。

④では、21 歳で授具足を受けて比丘となり、その翌年には Dhammakitti 師の承認によりすべての僧に対する註釈書と勝義法（アビダンマ）についての学識考査役を委ねられた、と語られている。驚くべきことに、雨安居歴 2 年の若輩比丘でありながら教法講師に任じられたわけである。この時期に Dhammakitti 師は在家信徒の招請によって別の寺に住していたらしい。このため、Ñāṇagambhīra 比丘は、住持の代理として学識考査役を任されたようである。

⑤では、Ñāṇagambhīra 僧は、実は 17 歳の時から授具足後 3 年目までの 7 年のあいだ講師をしていたとし、その間のこととして、恐らく当時の Wat Suan Dòk 派内における法（dhamma）と律（vinaya）であろうが、3 年間それらを吟味した結果、本物のブッダの法・律とは合致しない 10 の特徴を見た、と言う。つまり、問題点を発見したというのである。

1 つは授具足戒式の執行法のことで、4 名の僧に仏像を加えた「5 僧」で現前僧伽を結成し清浄ではない授具足戒式をなしている、と言う。これは、前の拙稿（p.256）で触れている如く、Wat Suan Dòk 派の祖たる Sumana 長老の師の師である Matimā 長老がなした授具足戒式の執行法と同一である。チエンマイの Wat Suan Dòk 派でも斯様な僧団儀式が執行されていたのかは分からないが、先

ずはこれを問題として挙げている。残りは、原典（MS[CP/T].）の本文が乱れており文意が解し難い（※MS[P+P]. でも同様。このためか MS[CP/T]. は当該部分を訳していない）のであるが、〔恐らく当時 Wat Suan Dòk 派内で読誦されていた〕パーリ語文における間違いを指摘するもののようである[21]。そこに列挙されている問題点は様々で、経典では接頭辞“a-”の付いていない語に態々“a-”を付けているとか、語義・句意の解釈を巡ることもとりあげられており、単純にパーリ語の土着語訛による事象とは片付けられないような問題も含まれている。Ñāṇagambhīra 僧が言うところによれば、当時のチエンマイ僧が読誦していたパーリ語はかなりいい加減なものであったようである。Wat Pā Däng 派の成立に関わることとしては、羯磨文（Kammavācā）の乱れ、即ち僧団儀式が無効となりかねない問題も指摘されている[22]。

続く⑥では、上述の問題点を見つけた Ñāṇagambhīra 僧が、師僧である Dhammakitti 長老にそのことを質しに行ったということが語られている。Dhammakitti 師は、この問題に対して回答することはせず、〈我々の先生は、あちらのアヨーティヤーなる南のムアンから伝来してきているに過ぎない。若いそなたが真にはっきり知りたいのなら、あちらの南のムアンにいる Dhammagambhīra のところに行ってすべて尋ね、はっきりするようになさい〉［MS[CP/T]. p.13］と述べた、と言う。ここに言われる「アヨーティヤー」とはスコータイ（※A.D.15c 初頭にアユタヤに吸収）も含む領域を指すものと思われるが、Dhammakitti 師は Wat Suan Dòk 派の祖である Sumana 長老の故地へ行くよう指示した。そこには“Dhammagambhīra”という名の僧がいた。恐らく Sumana 長老の法脈に連なる学僧なのであろうが、この僧に尋ねるようにと助言したのである。

MS.CP 第 11 章前半部の末部である⑦では、Ñāṇagambhīra 僧の Wat Bān Lān Kum Kām（วัดบ้านลานกุมกาม）[23] への入寺のことが語られている。C.S.784 年（A.D.1422 年頃）の出来事である。Ñāṇagambhīra 僧は、すぐにでもアヨーティヤーに行きたかったらしいが、その年には機会がなかった。「都の北」なる場所に Wat Bān Lān Kum Kām が建立され、Dhammakitti 師が住持として招請されていたようであるが、同師は Ñāṇagambhīra 僧を代わりに行かせたからである。この別寺院への入寺の話は、例えば派内の問題点を言うことによって住僧間に軋轢が生じたなど、何らかの理由で Ñāṇagambhīra 僧を遠ざけておくためと勘ぐることもできて微妙なのであるが、④の語りの脈絡からすると、その才智を評価されて Dhammakitti 師の代理を担ったということ、つまり栄誉と見做すのがひとまず

穏当かと思う。

４．むすび

以上までが前半部の語りである。これに接続する後半部の冒頭では、前の拙稿で紹介しているように、C.S.782 年にスリランカに行き C.S.785 年に帰還した Wat Suan Dòk 派の Mahāsurinda 師ら 3 名の僧が、スリランカで Wat Suan Dòk 派の授具足戒式は無効であると指弾されたという話が語られている。この指弾の報告を受けた Dhammakitti 師は、スリランカに僧侶を派遣することを決定するのであるが、前半部における⑥⑦の語りは、この派遣団の長として Ñāṇagambhīra 僧を選んだということの伏線になっている。

第 11 章前半部の⑥⑦においては、Mahāñāṇagambhīra 師がスリランカで縷々指摘されるよりも以前に、Wat Suan Dòk 派の問題、即ち、僧団儀式の執行法やこれと深く関わるパーリ語の「字音」（อักขระ = P. akkhara）の問題にある程度気づいていたということが語られている。若年の頃から Wat Suan Dòk 派の寺で三蔵・註疏のほかパーリ文法書を熱心に学んでいて、神童的天才を発揮したということが、それを可能にしたとする。そして、その問題点を同派の大物である師僧の Dhammakitti 師に告げており、同師はアヨーティヤーの “Dhammagambhīra” 僧のもとで解決するよう助言していた。Ñāṇagambhīra 僧はすぐにその機会を得られなかったが、その翌年に偶々 Mahāsurinda 師らの報告があり、Ñāṇagambhīra 僧は、Dhammakitti 師の指図のもと、アヨーティヤーの “Dhammagambhīra” 僧を訪ねて教示を得ることもできたし、問題の根本的解決を図ることのできたスリランカ渡航も実現した、というわけである。

MS.CP 第 11 章後半部のみから見ると、Wat Pā Däng 派の成立というのは、Mahāsurinda 師の報告を受けた Dhammakitti 師の指図によるスリランカへの Ñāṇagambhīra 僧らの派遣がその契機ということになるのだが、これに接ぐ前半部にまで目を遣ると、斯様な外発的要因に先駆けて、Ñāṇagambhīra という逸材僧ならではの旺盛なる仏典研究活動があったということが、つまりは内発的要因が、必須不可欠的にあったという話になるだろう。この話のどこまでが「史実」であるのかは分からないが、Wat Suan Dòk 派において斯様な内発的要因のあったことを示すことで、新たな僧派が成立せざるをえなかったところの原因を Wat Suan Dòk 派にも応分に背負わせるかたちにしているようにも見える。つま

り、優秀な僧さえいれば発見できた問題点がこれまで発見されないままであったという、Wat Suan Dòk 派の学問・僧侶育成の不備や無作為の責任を、Wat Pā Däng 派成立の立役者 Ñāṇagambhīra 僧を希有の偉人に仕立てつつ、指摘しているようにも見える、ということである。

MS.CP より撰述期が先行する Jkm では、その第 23 章において、C.S.785 年（A.D.1423 年頃）に“Mahādhammagambhīra”ら 33 名の大長老が集う会議が開かれスリランカ渡航を決議した、とある［Jkm.pp.92-93］。その後のスリランカでの修学内容からすると、彼らがスリランカへ渡ったのは、当時のスリランカにおけるパーリ語の“akkhara-paveṇi”（文字体系の慣用）と、これに沿った“pada-bhāṇa”（読）及び“sara-bhaññ a”（誦）を学ぶためであったと考えられるのであるが［Cf. 古山 2019. pp.269-266］、何故にこの僧たちにパーリ語のそれらを学びに行く必要が生じたのかは語られていない。ただ、この語りの冒頭に置かれている、〈Tissa 王（※ サームファンケーン王）がその Nabbisi 都（※ チエンマイ）において統治していた時に、Medhaṅkara をはじめとする大長老たちが、ランカー島（※ スリランカ）からここにやって来た〉（p.92,v.113）との 1 詩句に注意し、この Medhaṅkara 師のチエンマイ到来を、この僧も参加していた“Mahādhammagambhīra”をリーダーとする派遣団の帰還とは別の出来事を述べていると解することが可能ならば[(24)]、そして、それが 33 名の大長老が集う会議での決議に結び付いたのであるとするならば、A.D.15c 初め頃に、“Mahādhammagambhīra”に先駆けてスリランカを訪問していた僧侶ら ― MS.CP に登場する Mahāsurinda 師らも同様の僧たちと言える ― からの報告が、当時のスリランカにおけるパーリ語の“akkhara-paveṇi”を学ぶ意欲を掻き立てたのではないかと考えられる。Jkm の第 23 章には、セーンムアンマー王（Lakkhapurāgama-rāja）がパーリ語文法（sadda-sattha）の学習を奨励していたとする記述（p.92,v.106）があるので、斯様な遠因は考慮しなければならないものの、C.S.785 年の“Mahādhammagambhīra”らのスリランカ訪問というのは、直接的には、それ以前のチエンマイ僧らのスリランカ渡航による外部世界との接触がその契機となっている側面が強くなるであろうから、外発的要因が主であるということになろう。仮にこれが事の真相であるとすると、MS.CP 第 11 章前半部の語りというのは、過分に脚色的なのではなかろうかとも思えてくる。筆者は Ñāṇagambhīra 僧がパーリ語の研究に熱心な優秀な比丘であったことまで否定する気はないが、「勝者の歴史」ならではの派執的態度がここにも浸潤している可能性は否めないであろう。更に論考を重ねてみたい。

本稿に使用した略記

C.S.：Cūla-sakkarāja（จุลศักราช：タイ小暦）　B.E.：*Buddhist Era*（พุทธศักราช：タイ仏暦）

PTS：the Pali Text Society

参考・参照文献と略号

C-Chronicle. : อรุณรัตน์ วิเชียรเขียว, เดวิด เค. วัยอาจ, ed. *ตำนานพื้นเมืองเชียงใหม่*. B.E.2543. Chiang Mai : Silkworm Books, B.E.2547(Rep.).

C-Chronicle-tr. : *The Chiang Mai Chronicle*, *Second Edition*. Trans. David Wyatt & Aroonrut Wichienkeeo. Chiang Mai : Silkworm Books, 1998.

Chiu2011. : Angela Chiu. '"Fire and Water": Buddha Images, Monks and Patrons in Monastic Chronicles of Chiang Tung.' *Shan and Beyond, Essays on Shan Archaeology, Anthropology, History, Politics, Religion, and human Rights*. Ed. Montira Rato & Khanidtha kanthavichai. Bangkok: Institute of Asian Studies Chulalongkorn University, 2011 79-95.

Daniel2006. : Daniel M. Veidlinger. *Spreading the Dhamma, Writing, Orality, and Textual Transmission in Buddhist Northern Thailand*. Chiang Mai: Silkworm Books, 2006.

Hazra1981. : Kanai Lal Hazra. *History of Theravāda Buddhism in South-East Asia, with Special Reference to India and Ceylon*. New Delhi : Munshiram Manoharlal Publishers Pvt. Ltd., 1981 (Fourth Impression 2008).

Jkm. : A.P.Buddhadatta, ed. *Jinakālamālī*. London: PTS, 1962.

Jkm-Ind. : Hans Penth. *Jinakālamālī Index, An Annotated Index to The Thailand Part of Ratanapañña's Chronicle Jinakālamālī*. Chiang Mai: PTS &Silkworm Books,1994.

Jkm-tr[J/E]. : Ratanapañña Thera. *The Sheaf of Garlands of the Epochs of the Conqueror, Being a Translation of Jinakālamālīpakaraṇaṃ*. 1968. Trans. N. A. Jayawickrama. London: PTS, 1978 (Rep.).

KT-Isc. : A.B.Griswold & Prasert ṇa Nagara. 'An Inscription from Keng Tung (1451 A.D.).' *The Journal of the Siam Society* 66.1 (1978) : pp.66-88.

Luce & Ba Shin1961. : G.L.Luce & Ba Shin. 'A Chiang Mai Mahāthera Visits Pagan (1393 A.D.).' *Artibus Asiae*, Institute of Fine Arts New York University 24 No.3/4(1961) :pp.330-337.

MS. : *ตำนานมูลศาสนา*. Nonthaburi : สำนักพิมพ์ศรีปัญญา, B.E.2557.

MS[L/T]. : บำเพ็ญ *ระวิน*. *มูลศาสนา สำนวนล้านนา (LAN-NA MULASASANA)*: *รายงานการวิจัย*. Chiangmai: Faculty of Humanities Chiang Mai University, B.E.2539.

MS[CP/E]. : Sommai Premchit & Donald K. Swearer. 'A Translation of Tamnān Mūlasāsanā Wat Pā Daeng: The Chronicle of the Founding of Buddhism of the Wat Pā Daeng Tradition.' *The Journal of the Siam Society* 65.2 (1977) : pp.73-110.

MS[CP/T]. : *Tamnan-Mulasasana, Ttransliteration Series IX*. Trans. Sommai Premchit & Puangkam Tuikheo. Chiang Mai: Chiangmai University, 1976.

MS[P+P]. : ประเสริฐ ณ นคร & ปวงคำ ตุ้ยเขียว. *ตำนานมูลศาสนาเชียงใหม่ เชียงตุง*. B.E.Bangkok : สมาคมประวัติศาสตร์ในพระราชูปถัมภ์ สมเด็จพระเทพรัตนราชสุดาฯ สยามบรมราชกุมารี, B.E. 2562(Rep.).

Ongsakul2005. : Sarassawadee Ongsakul. *History of Lan Na*. Ed. Dolina W. Millar & Sandy Barron. Trans. Chitraporn Tanratanakul. Chiang Mai : Silkworm Books, 2005.

Penth1994. : Hans Penth. *A Brief History of Lan Na*, *Civilizations of Nothern Thailand*. Chiang Mai : Silkworm Books, 1994.

Penth2004. : Hans Penth. *A Brief History of Lan Na*, *Nothern Thailand from Past to Present*. Chiang Mai : Silkworm Books, 2004.

TamLT. : สงวน โชติสุขรัตน์. *ประชุมคำนานล้านนาไทย*. B.E.2515. Nonthaburi : สำนักพิมพ์ศรีปัญญา, B.E.2555(Rep.).

Tantalanukul2010. : ประวิทย์ ตันตลานุกุล. *เชียงใหม่-เชียงตุง บ้านพี่เมืองน้อง*, *Chiangmai & Chiangtung Are Sister Cities*. Chiang Mai : มูลนิธิการศึกษาและเผยแผ่พระพุทธศาสนาภูมิภาคลุ่มแม่น้ำโขง มหาวิทยาลัยมหาจุฬาลงกรณราชวิทยาลัย วิทยาเขตเชียงใหม่ วัดสวนดอก เชียงใหม่, B.E.2553.

Wichienkeeo1996. : อรุณรัตน์ วิเชียรเขียว. *วัดร้างในเวียงเชียงใหม่*. B.E.2529. Chiang Mai: สุริวงศ์บุ๊คเซน เตอร์(Suriwong Book Centre), B.E.2539(A.D.1996)(Rep.).

Y-Chronicle. : พระยาประชากิจกร. *พงศาวดารโยนก*. Nonthaburi : สำนักพิมพ์ศรีปัญญา, B.E.2557.

Zinme. : Sithu Gamani Thingyan. *Zinme Yazawin*, *Chronicle of Chiang Mai*. Ed. Tun Aung Chain. Trans. Thaw Kaung & Ni Ni Myint.Yangon : Universities Historical Research Centre, 2003.

飯島 1998. : 飯島明子「ラーンナーの歴史と文献に関するノート―チエンマイの誕生をめぐって―」新谷忠彦編『黄金の四角地帯―シャン文化圏の歴史・言語・民族』（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所歴史・民族叢書Ⅱ）、慶友社、1998 年

飯島 2001. : 飯島明子「「タイ人の世紀」再考―初期ラーンナー史上の諸問題」『岩波講座東南アジア史第 2 巻　東南アジア古代国家の成立と展開』、岩波書店、2001 年

中村 2015. : 中村哲夫『タイ北部歴史伝説探訪 改訂版』、（私家版）、2015 年

古山 2017. : 古山健一「*Jinakālamālī* について ―特に 1 つの難句をめぐって―」『駒澤大学仏教学部論集』第 48 号（2017 年 10 月）

古山 2019. : 古山健一「Wat Pā Däng 派の成立に関する小考」『駒澤大学仏教学部論集』第 50 号（2019 年 10 月）

L-Dict. : พจนานุ*กรมภาษาล้านนา*, *The Lanna Dictionary*. Chiang Mai : สถาบันภาษา ศิลปะและวฒนธรรม มหาวิทยาลัยชภัฏเชียงใหม่, B.E. 2550.

NTh-Dict. : อรุณรัตม์ วิเชียรเขียว และคณะ. พจนานุกรมศัพท์ล้านนา เฉพาะคำที่ปรากฏในใบลาน, *The Northern Thai Dictionary of Palm-leaf Manuscripts*. Chiang Mai : Sikworm Books, B.E.2539.

タ日 . : 冨田竹二郎編『タイ日大辞典』、日本タイクラブ・めこん、1997 年

タ辞 . : 松山納『タイ語辞典』、大学書林、1994 年

註

(1) Wat Pā Däng（ワット・パーデーン）派とは、同派の伝承によれば、A.D.15c 前半のラーン・ナー王国サームファンケーン王（พญาสามฝั่งแกน）の治世期に、先行のスリランカ系僧派である Wat Suan Dòk 派内で僧団儀式の際の朗誦等におけるパーリ語の “*orthoepy*” が問題となり、これを改革すべく、Jkm の人名表記によれば Mahādhammagambhīra 師らが、また MS.CP のそれによれば Mahāññaṇagambhīra 師らが、スリランカに留学して授具足戒式を受け直し、チエンマイに戻ってその流儀による僧団儀式を執行し始めたことによって出現した僧派である。前の拙稿［古山 2019.］で述べた如くである。

ちなみに Wat Suan Dòk（ワット・スワンドーク）派とは、A.D.14c 後半期のクーナー王（พญากือนา）の治世期に、Sumana 長老がスコータイ王国からチエンマイへ招聘されたことを契機に、同師が住まったチエンマイの Wat Suan Dòk を拠点として形成された僧派である。Sumana 長老の師匠であり、ミャンマー南部地域にいた Udumbara 師が、スリランカ仏教の伝持者であると考えられることから、Wat Suan Dòk 派もスリランカ系僧派と見做されており、Wat Pā Däng 派とともに、タイ語で「ランカーウォン（ลังกาวงศ์ < Skt. Laṅkāvaṃśa）」と呼び名され、また現代の欧米の学者らによっては "*Sinhalese school*" という概念で括られている。このようにラーン・ナー仏教には 2 つの "*Sinhalese school*" と呼びうる僧派があったのであるが、両派に同じ呼称を与えただけでは混乱を来すので、区別がつく呼称にして各々を呼ぶようにしている。Hans Penth は、Wat Suan Dòk 派を "*the old or first Sinhalese school*" とし、Wat Pā Däng 派については "*new, later or second Sinhalese school*" と述べている［Penth2004.p.74ff.］。前稿でも述べた如く、Wat Pā Däng 派は、自派には "Sīhaḷa-saṅgha" や "Sīhaḷa-gaṇa"、"Sīhaḷavaṃsika" といった呼称を与えているが、Wat Suan Dòk 派にそうすることは決してない（※Jkm での例）。自らこそがスリランカ仏教の真っ当な伝承者であるとの気負いが強く、Wat Suan Dòk 派を "*Sinhalese school*" とは認めない立場に立っている。A.B.Griswold と Prasert ṇa Nagara の論考では、Wat Pā Däng 派は頑固で傲慢な傾向があり Wat Suan Dòk 派を公然と批判する、と述べられている［KT-Isc. p.67］。

(2) 本稿で原典として用いている Wat Pā Däng 版 *Mūlasāsanā*（*ตำนานมูลศาสนา ฉบับวัดป่าแดง*）は、前稿と同じく、1976 年にチエンマイ大学から刊行された、Sommai Premchit らによる現代タイ文字への翻字テキスト（MS[CP/T].）である。なお、この翻字本には章区切りが付されており、全体が 23 の章に分かたれている。また各章に章題も付けられている。この章区切りと章題は Sommai Premchit が付したものである。筆者（古山）はそれらが真っ当であるのか否かについて議論の余地があるように思うのであるが、それを一々とりあげるのは本稿の目的から逸脱するので、ここではひとまず措いておきたい。

MS[CP/T]. は英訳されている。それは 1977 年に *The Journal of the Siam Society* 誌に掲載された Sommai Premchit と Donald K. Swearer の共訳による英訳（MS[CP/E].）である。訳者自身が "...the translation is not literal one."（p.74 footnote2）と述べている如く（原テキストに混乱があるため仕方がない）、達意訳的なものであるが原典を読解するのに参考になるので、前稿でもそうしたように、積極的に利用する。

ところで、MS[CP/E]. の序文の中には、ミシガン大学の Sao Sāimöng Mangrai がチエントゥンの伝本からの翻訳研究を進行中である旨が記されている（p.74）。Sao Sāimöng Mangrai はこれを見事果たし 1981 年に刊行したようである。これは 2002 年に再版されている。ミシガン大学東南アジア研究センター（University of Michigan Center for South East Asian Studies）から、*Michigan Papers on South and Southeast Asia* の Volume 52 として出された "*The Pāḍaeng Chronical and the Jengtung State Chronical Translated*" と題するチエントゥン年代記類の英訳研究書がそれである。重要な工具であるが残念ながら筆者（古山）の手元には初版も再版もないため目下は未見であり、本稿では利用できないことをお詫びしたい。Angela Chiu によれば、この Sao Sāimöng Mangrai の英訳研究書は、"*Mūlasāsanā*" との表題は付されていないが、そこにはチエントゥンの Wat Pā Däng 派系の *Mūlasāsanā* で語られている出来事の多くが言及されており、特徴としては、チエントゥンの出来事や状況についての言及がより豊富になっているとのことである［Chiu2011. p.82 footnote1］。

(3) 飯島明子は〈…『ムーラサーサナー（仏教の本源）』は、著者と目されるスワンドーク寺派の僧侶の名（プッタプカームとプッタヤーン）が知られるうえ、『ジナカーラマーリー』より早く、一四七五年頃に成ったと考えられるため、仏教学・仏教史のみならず、初期ラーンナー史史料として重要である。パーリ語の『ジナカーラマーリー』と異なり、地の文はラーンナー地域のタイ語であり、タム文字で書かれた写本がラーンナー地域に多数伝わる。従来はタイ国国立図書館所蔵本による杜撰な刊本に頼らねばならかったが、近年、北タイにおける写本調査の過程で見出された現存最古の写本（小暦一一七五／一八一三の作）を底本として、異本三本と校合した校訂本が故バンペン氏の労により成った（*MS.B*）。「ムーラサーサナー」と題されるテクストには前記の他に、同じくチェンマイのスワンドーク寺派の別テクスト、チェントゥンのヤーンクアン寺派（*MS. P+P*）及びパーデーン寺派（*MS.S*）のテクスト等がある〉［飯島 2001.p.280 註 (3)］と述べている。なお、引用文中の略号 “*MS.B*” とは MS[L/T]. を、“*MS. P+P*” は MS[P+P].、そして “*MS.S*” は MS[CP/T]. を指す。

(4) この 3 系統のテキストを網羅したものに、Prasert ṇa Nagara らによる MS[P+P]. がある。ここには、チエンマイの Wat Muang Māng（วัดเมืองมาง）の貝葉写本から現代タイ文字に翻字したチエンマイの Wat Suan Dòk 派系テキスト、ラムパーンの Wat Bupphārām Bān Uean（วัดบุพพารามบ้านเอื้อม）の貝葉写本から翻字したチエントゥンの Wat Pā Däng 派系テキスト、ラムパーンの Wat Bān Uean（วัดบ้านเอื้อม）の貝葉写本から翻字したチエントゥンの Wat Yāng Kuang 派系テキストが収載されている。

(5) MS.CP［MS[CP/T].pp.20-22；Cf. MS[CP/E].pp.96-98］によれば、C.S.805 年（A.D.1443 年頃）に、Mahāṇāṇagambīra 師は、自らのもとへやって来た神（เทวดา < Skt. devatā）の言葉にしたがい、Somacitta 師ほか 5 名の僧をチエントゥンに派遣しているが、そこでは聖水と護呪経読誦による悪鬼（เผต = เปรต < Skt. preta）祓いの儀礼を執り行ったのみで、授具足戒式を行うことはなかった。悪鬼祓いは成功して国王は感服した。在地の僧侶が降伏に手を焼いていた悪鬼を見事に祓いのけたからである。この出来事が翌 C.S.806 年の Somacitta 師らの招請と再派遣の呼び水となった。

なお、MS.CP より古い Jkm には〈C.S.810 年に、Somacitta 長老は Khema 王国（※ チエントゥン）において sīhaḷa-sāsanā を定着させた〉［Jkm. pp.96-97；Cf. Jkm-tr[J/E].p.136］とある。Jkm では “sīhaḷa-sāsanā” 即ち Wat Pā Däng 派の仏教のチエントゥン定着を C.S.810 年としている。MS.CP には、C.S.810 年に、国王の寄進によりチエントゥンの Wat Pā Däng に結界処である布薩堂が建立され、Somacitta 師が結界標識の石を設置し、Mahāvagga（パーリ律大品）の Uposatha-kandha（布薩犍度）に依拠した結界認定の僧団儀式が執り行われた、と述べられている［MS[CP/T].p.26；Cf. MS[CP/E].pp.102 -103］。Jkm は Wat Pā Däng 派の流儀による布薩堂設置を “sīhaḷa-sāsanā” の定着と考えているのかもしれない。いずれにせよ、A.D.15c 半ば頃にはチエンマイの Wat Pā Däng 派の仏教がチエントゥンに移植されたということは間違いないであろう。

(6) 前稿（p.254）に言及した如く、MS.CP の第 8 章には、クーナー王が自らの花園を Pupphārāma と呼ばれる僧院（= Wat Suan Dòk）にして、そこに Sumana 師を住まわせると、チエンセーンやチエントゥンの僧たちが修学のために参集し、出家（授具足のことであろう）した、と述べられている。

(7) MS[CP/T]. の原文は “ตั้งพุทธรูปคัมภีรเถรเจ้าตนเป็นเถ้า [เฒ่า] แก่อยู่วัดสวนดอกเชียงใหม่พุ้น”（p.25）であり、頭領（เถ้า = เฒ่า）たる長老僧の名は “Buddharūpagambhīra（พุทธรูปคัมภีร）” としているが、[CP/E]. は “The respected Theras of Wat Suan Dọk, Chiang Mai, of which Buddhimā Thera and Buddhagambhīra Thera are foremost,...”（pp.101-102）との英訳を与え、長老僧として Buddhimā と Buddhagambhīra の 2 僧

の名を挙げている。恐らく、MS[CP/T]. の原文に混乱があると判断して、別本により改めたものと推察される。なお、MS[P+P]. に収載のテキストを見ると、当該箇所の対応箇所は “ตั้งพุทธิมาเถรก็ดี พุทธคัมภีรเถรเจ้าเป็นตนเป็นเฒ่าเป็นแก่ อยู่วัดสวนดอกเชียงใหม่พัน”〈世に聞こえた Buddhimā 長老でも、Buddhagambhīra 長老猊下〔でも〕頭領たる僧であり、かのチエンマイの Wat Suan Dòk に長年住していた〉(p.197) となっている。ここに Buddhimā (พุทธิมา) と Buddhagambhīra (พุทธคัมภีร) の 2 長老の名が挙がっている。斯様なテキストから改めたのであろう。それはさておき、MS[CP/T]. の原文にあるところの “Buddharūpagambhīra（พุทธรูปคัมภีร）” というのは、“Buddhagambhīra” の誤写であろうと推定する。

ところで、ここにその名が挙げられている 2 長老であるが、“Buddhimā” は目下不詳であるが、“Buddhagambhīra” については Wat Suan Dòk の第 5 代住持を指しているのではないかと考えている。MS.CP 第 10 章は Wat Suan Dòk の歴代住職リストになっているが、そこに第 5 代住持としてその名が見える。この長老は、C.S.806 年（A.D.1444 年頃）に住職に就任してカット・マオ（กัดเหม้า）の年（C.S.821 年 = A.D.1459 年頃）に没した［MS[CP/T].p.12；Cf. MS[CP/E].p.85］とあるので、年代的な齟齬はなく、またその職責もまさに「頭領」と呼びうるものであるから、“Buddhagambhīra” を Wat Suan Dòk の第 5 代住持と考えることは十分に可能であろう。Wat Suan Dòk 派の *Mūlasāsanā* のほうにも、同寺の第 5 代住職としてその名が挙げられている。ただしそこでは、Wat Suan Dòk に住して 15 年間教法を護持し C.S.815 年（A.D.1453 年頃）に寿命が尽きた、とある［MS.p.246］。在位期間・死没年が MS.CP 第 10 章のそれと相違しているが、Somacitta 師らがチエントゥンで授具足戒式を始めた時期とは重なっているから、この “Buddhagambhīra” を Wat Suan Dòk の第 5 代住持と見做すことができよう。

(8) Tantalanukul2010. には、Indamunī 師は Sumana 師の弟子であると書かれている (p.54)。そうであれば、Indamunī 師は Wat Suan Dòk 派系統の僧として括りうるであろう。この辺りの事情については今後の検討課題としたい。

(9) ヨーティヤー（アユタヤ）のソムデット僧 Dhammagambhīra 師というのは、MS.CP 第 11 章・第 12 章に登場する、Mahāñāṇagambhīra 師がスリランカに渡航する際に助言を与えた同名のアユタヤの高僧を指すと考えて間違いなかろう。しかし、何故にここで Indamunī 師の弟子たちが Dhammagambhīra 師のことに言及して Somacitta 師らのことを評価するのかは、目下の筆者には詳らかではない。

ところで、A.B.Griswold と Prasert ṇa Nagara が研究し紹介している A.D.1451 年のチエントゥンの碑文の中には、その第 2 面（Face II）に、Jayamantārāma の住持 Khemamaṅgala が、どこかへ出掛けて行って、スリランカから戒律とともに仏教をもたらした Dhammagambhīra 師の学派 (สำนักเจาธำคำ(ภยร)) において再授具足を受けた、ということが記されている［KT-Isc. pp.73ff.］。C.S.796 年（A.D.1434 年頃）の記事と C.S.804 年（A.D.1442 年頃）または同 805 年（A.D.1443 年頃）の記事の間にそのことが記されているから、この期間に Khemamaṅgala 師は再授具足したものと考えられる［Cf. Daniel2006. p.78］。Khemamaṅgala 師は、再授具足の後、Dhammagambhīra 師のもとで修学し、僧団儀式執行の権限を認可されてチエントゥンに戻っている。この “Dhammagambhīra” がもたらしたスリランカ仏教が、Khemamaṅgala 師を介して、Somacitta 師らがチエントゥンに来るほんの少し前の頃にチエントゥンに入って来ていた。この碑文に現れる “Dhammagambhīra” なる僧の詳しいことはよく分からない。C.S.792 年か C.S.793 年にはチエンマイに帰着していた、チエンマイ Wat Pā Däng 派成立の立役者である Dhammagambhīra 師であるかもしれないし、アユタヤの高僧

Dhammagambhīra 師を指しているのかもしれない。

なお、MS.CP には、Siṅhalarattārāma（= Wat Pā Däng）のソムデット位長老たる僧団指導者の名を列挙する箇所があるのであるが、そこでは“Somacitta”の次に“Khemamaṅgala”の名が見える［MS[CP/T].p.32；Cf. MS[CP/E].p.110］。この“Khemamaṅgala”が上述の碑文に登場する僧と同一であれば、この僧も Wat Pā Däng 派に加入したということになるであろう。

(10) チエントゥン領主 Āditta 王が Wat Yāng Kuang 派の僧に Wat Pā Däng 派で再授具足を受けさせる直前のことであるが、チエンマイのムアン・ケーオ王（พระเมืองแก้ว）は Āditta 王に助言を伝えている。これは、チエンマイにも飛び火してきたチエントゥンにおける 2 つの僧派の諍論を憂慮して、その解決を促すべく Āditta 王に与えた助言と言える。その内容は、①チエンマイでは Wat Suan Dòk 派も Wat Pā Däng 派も等しく支援している、②仏教の悪化を引き起こしてはならない、③ Āditta 王は 2 つの僧派を支援すべきである、④ Wat Pā Däng 派は相手を赦し Wat Yāng Kuang 派は王命に従うべきである、というものであった［MS[CP/T].p.31；Cf. MS[CP/E].p.109］。これは「争っている 2 つの僧派を和解させた上で国王は両僧派を等しく外護せよ」という意に取れるが、Āditta 王は、この助言が伝えられる以前にすでに決めていた方針を変えず、Wat Yāng Kuang 派の僧を Wat Pā Däng 派に合流させて解体するかたちで解決を図った。Wat Yāng Kuang 派の僧たちは、Āditta 王の不興を買った C.S.870 年の雨安居の件の後に同王から厳しく叱責されており、その影響からか、大方は Wat Pā Däng 派への合流をやむなしとして受け容れていたようである（チエントゥンを去った一部の僧たちもいたが、主導者が亡くなり結局チエントゥンに戻ったようである）。ゆえに、この合流は比較的スムーズに事が運んだようである。

(11) 前稿でも触れているが、MS.CP には、C.S.970 年（＝ブーク・サン（เบิกสัน）の年、B.E.2152）に僧団主 Mahāvarapaññā 師が僧団に出した訓誡布告の語り［MS[CP/T].p.28；Cf. MS[CP/E].p.105］がある。これが最も新しい記事である。ゆえに、その編述年代は、C.S.970 年（A.D.1608 年頃）よりも後でなければならない。筆者（古山）は、MS.CP の編述は C.S.970 年からそれほど離れておらず、A.D.17c の初め頃に編まれたものではないかと推定している。

なお、Hans Penth は、両派の対立抗争の終息後について、〈…その後、気性は落ち着き、恐らくは 1550 年から 1600 年までには、論争の的になっている諸点はそれほど重要ではなくなり、静かに「消えた」ように見えるが、やはり恐らく、それは Wat Pā Däng 派の数が徐々に減少したためであろう〉［Penth2004. p.77］と述べている。氏の推定が確かであれば、MS.CP の編述時期は、諍論の原因となった「反逆」や「破僧」といった点が意識されなくなり、また、Wat Pā Däng 派そのものの教勢が衰退の兆しを見せていた頃ということになるが、MS.CP 自体の語りは勢いが盛んである。大昔のどうでもよくなった事件ではないようである。

(12) この「呪術的な神判の如き方法」というのは、2 枚の貝葉を用意し、1 枚にはチエンマイのソムデット師（ครูสมเด็จเชียงใหม่、Dhammakitti 師のことと思われる）の名を書き、他方の 1 枚には Mahāñāṇagambhīra 師の名を書き、都市の神々（devatā）、仏教の守護者、帝釈天・梵天に祈った上で、各々を火の中に投げ込む。Mahāñāṇagambhīra 師が Dhammakitti 師の弟子同然である（= Wat Suan Dòk 派との縁が切れていない＝反逆者であり破和合僧の輩である）ならば、Mahāñāṇagambhīra 師の名を記した貝葉が焼け、そうでなければチエンマイのソムデット師の名を書いた貝葉が焼ける、というものである［MS[CP/T].p.30；Cf. MS[CP/E].p.108］。これを提案した「大僧団王」は、ミャンマーでの故事を語る中でこの行為を“sacca-adhiṭṭhāna”（※「真実」に不可思議力があるとする観念の上

になされる奇跡を起こそうとする祈念行為）としているが、穿った見方をすれば、過分に運任せ的な判定法と言うべきであろう。

(13) 第 18 章冒頭部では、チエンマイに戻った Mahāñāṇagambhīra 師が師匠の Dhammakitti 師のもとへ挨拶と報告に行ったところ、Dhammakitti 師は、Wat Suan Dòk 派の僧たちに、「仏教の発展」のためであるとして Mahāñāṇagambhīra 師のもとでの再授具足を勧め、仏教を学ぶよう指示した、ということが語られている。その結果、Wat Suan Dòk 派の多くの僧や在家者が参集して授具足戒式を受けるようになり、修行生活の場所の確保に困ったほどであった、と言う（これを見かねて、チエンマイの王妃が寺院を建立寄進した）［MS[CP/T].p.19；Cf. MS[CP/E].p.94］。つまり、「反逆」や「破僧」というかたちなのではなく、Wat Suan Dòk 派の僧長の言葉によって、新たな授具足戒式が執行され、新しい僧派が形成されたとしているのである。

(14) Angela Chiu は、Wat Yāng Kuang 派の *Mūlasāsanā* では Wat Pā Däng 派の創立者の僧名は “Dhammagambhīra” とされていることを指摘した上で、これは “Ñāṇagambhīra” のことではない可能性があるとし、Sao Sāimöng Mangrai によるチエントゥン *Mūlasāsanā* の英訳研究書（※ 註 (2) を見よ）では、“Ñāṇagambhīra” なる僧は、自分の和尚と争いスリランカに逃げてチエンマイに戻ってからはもといた僧派を非難した（さらに還俗して結婚したとも）と言われる “Dhammagambhīra” なる僧とは対比されている、と述べている［Chiu2011. p.82］。チエントゥンの伝承では、Wat Pā Däng 派の創立者の名について、“Dhammagambhīra” と記す場合と “Ñāṇagambhīra” と記す場合があるものの、この 2 つの名が同一人物を指しているとは一概に断ぜられないとしているのである。なお、Angela Chiu は同所で *Buddhist Literature in Lan Na*（Chiang Mai : Silkworm Books, 2005）に所載の Prasert ṇa Nagara の見解も紹介しているが、Prasert ṇa Nagara は、この 2 つの名は同一人物を指しておりスリランカでの再授具足の時点で多分僧名が変わった、との説を提示しているとのことである。

当該の 2 つの名が同一人物を指しているのかどうかについても、検討すべき課題が残されていると言えよう。

なお、宇治谷顕は、*Jinakālamālī* と *Mūlasāsanā* が伝える名の異なる人物について、〈…Dhammagambhīra と Ñāṇagambhīra とが同一人物であるか否かの疑問が残るものの、確証はないがその伝承内容がほぼ一致していることから同一人物であることは間違いないと信ずるものである〉（「『Mūlasāsanā』に記す Ñāṇagambhīra 僧の伝道」『宗教研究』第 271 号（1987 年 3 月）p.180）と述べている。*Jinakālamālī* が伝える “Dhammagambhīra” なる僧の事績と、*Mūlasāsanā*（どのテキストを見たのか？）が伝える “Ñāṇagambhīra” なる僧の事績には、確かに共通する部分が認められるが相違も多い。スリランカ渡航の経緯すら同じとは言い切れず、「ほぼ一致している」とは到底受け止められない。この 2 つの僧の名が同一人物を指していると「信じる」ことは自由であるが、斯様に断ずるには、かなり子細な検討が必要であろう。ちなみに同氏には、上に引用した論稿のほかにも、「ランナー・タイムにおけるスリランカ上座部仏教受容」（『宗教研究』第 259 号（1984 年 3 月）、※「タイム」は誤植であろう）と、「ランナータイのスリランカ上座部仏教受容について —そのⅡ—」（『宗教研究』第 263 号（1985 年 3 月））という論文がある。この両論文とも、*Jinakālamālī* と *Mūlasāsanā* を参照しているようであるが、この両書の相違を比較して注意を払うということはしていないように見受けられる。

(15) MS[P+P]. に所収のチエントゥン Wat Pā Däng 派系テキストにおいては、この Dhammakitti 師のことに触れた文は、チエンマイ Wat Suan Dòk の歴住リストの章（p.172）にではなく、次の夢見の章

（pp.173ff.）の方に置かれている。MS[P+P]. の翻字・校訂者は斯様に判断したのである。こちらの方が相応しいように思う。

(16) Wat Suan Dòk 派の *Mūlasāsanā* によると、Nandapañña 師は Wat Suan Dòk の整備に努めた住持であったようで、貴族の屋敷の材木を寄進されて同寺の仏塔の東側に僧房を建てたり、同寺の結界（sīmā）を拡張したりした。ただし、この拡張された結界は、後にランプーンから来た僧に「これは nagara-sīmā であり、gāmā-sīmā ではない」との難癖をつけられて、この僧によって解界されてしまったそうである［MS. pp.243-244］。

(17) MS.CP によると、Nandapañña 師の在住期間は、「カー・メット（กำเม็ด）の年」即ち C.S.765 年（A.D. 1403 年頃）から C.S.786 年（A.D.1424 年頃）までの 22 年間とされている。Wat Suan Dòk 派の *Mūlasāsanā* では、第 3 代住持の Mahānandapañña 師は、「カー・メット（กำเม็ด）の年」即ち C.S.765 年に就任し、「プック・セット（เปิกเส็ด）の年」即ち C.S.780 年（A.D.1418 年頃）に亡くなったとし、在住期間を 15 年間としている［MS. pp.243-244］。

(18)「耆宿たる全僧団の首座（เคล้าแก่สังฆะทั้งมวล）」［MS[CP/T].p.12］というのは、Jkm の言う都市住派（nagaravāsī）も含めたチエンマイの僧界全体の長という意味にも読める。しかし、実際に影響力を強く及ぼすことができたのは所属している Wat Suan Dòk 派内ではなかったかと考えるので、実質的には同派の僧長という地位であったかと思われる。

(19) Wat Suan Dòk 派の *Mūlasāsanā* によると、住職である Nandapañña 師は Wat Suan Dòk におけるパーティモッカ説戒師（ปาฏิโมกขุทเทสก์ ＜ P. pāṭimokkha-uddesaka）であり、別の寺（※วัดเก้าเลี้ยว、MS[L/T].p.166 によれば “วัดสรีบุญคันโต” とも）に “mahāsvāmī” の地位（มหาสวามีเจ้า）にある Sujāta 師がおり一切諸事を司る僧団指導者（saṅghanāyaka）であり、また授具足戒式師なる専門僧というのも 2 名いた、と言う［MS. p.244］。ここでも Wat Suan Dòk とは別の寺に大きな権限を持つ長老のいたことが語られている。

(20) 原語は “อัตถะบาลี” ［MS[CP/T].p.12］である。MS[P+P]. の対応箇所では “อัตถบาลี” （p.173）となっている。パーリ〔語〕の何かであることは分かるが意味不詳である。今は MS[CP/E]. における訳語“...the Pāli commentaries”（p.86）にしたがう。これは “อัตถะ” を “atthakathā” の略語と解した訳語である。

(21) MS[CP/E]. は、当該部分に訳を与えていないが、この 9 つについて “..., and the other nine with proper ways of chanting.”（p.86）と訳文中に註記している。

(22) 当該箇所［MS[CP/T].p.13；MS[P+P]. p.174］によれば、まず、出家（pabbajjā）の儀式で唱えられる三帰依文の “buddhaṃ saraṇaṃ gacchāmi” を “buddhām sara-araṇām”（※MS[P+P]. によれば “buddhām saraṇām”）云々と唱えている、と言う。“-aṃ” を “-ām” と発音し、“saraṇaṃ” を “sara-araṇām（สรอรณานฺ）” と唱えていた、ということである。また、白四羯磨文内の定型句 “suṇātu me bhante saṅgho” を “su-akkharaṇātu me bhante saṅgho”（※MS[P+P]. によれば “su-araṇātu me bhante saṅgho”）と唱えていた。“suṇātu” が可笑しな言葉になってしまっている。同じく白四羯磨文にある “yassāyasmato khamati” を “yassāyasahamanto khamati”（※MS[P+P]. によれば “yassāyahamanto”）と唱えていた、と言う。更には、何の文における語かは述べていないが、“tasmā” を「タッサハマー（ตัคสหมา）」（※MS[P+P]. によれば “tassamā”）と読んでいたとのことである。

(23) Wat Bān Lān Kum Kām（วัดบ้านลานกุมกาม）は、「城域内の北側（หัวเวียง）」なる場所に、ムーン位（หมื่น：1 万人の長）に叙せられていた貴族の仏教徒 Ping Chai（พิงไชย）が建立した寺院であり、この貴族は Mahādhammakitti 師を住持として招請したが叶わず、同師に代わって Mahāñāṇagambhīra 師が入

寺したと言う［MS[CP/T].p.13；Cf. MS[CP/E].p.87］。この寺院はチエンマイ都内の北側にあったようにも解せられるが、チエンマイの廃寺について調査した Aroonrut Wichienkeeo は、その所在地について、「ムアンの北方（หัวเวียง = ทิศเหนือของเมือง）」とのみ記して「不詳」とし、かつ「ウィエン・クムカーム都の北方にあったと分かる」と述べている［Wichienkeeo1996. p.59］。

(24) N.A.Jayawickrama は、Jkm-tr[J/E]. において、詩句中の“Medhaṅkara”に註記して〈タイの僧で、下では Mahāmedhaṅkara と呼ばれている。彼は数年早くにスリランカに滞在しており、Sumanakūṭa の仏足跡のレプリカをタイにもたらしている〉（p.129 footnote2）と述べて、*University of Ceylon History of Ceylon* の vol.1,p.755 を見よと記している。

ここに言われる“Sumanakūṭa”とは、今日“Adam's Peak”と呼ばれているスリランカ中央部にある霊山のことであり、“Mahādhammagambhīra”らも関心を寄せていた *Mahāvaṃsa* における釈尊のスリランカ巡錫譚と絡めて仏教徒が仏足跡と信じる“Śrī-pāda”と呼ばれる足跡が祀られている。この仏足跡は、関連する碑文の内容から“Medhaṅkara”なる僧がもたらしたことが知られているが、碑文における仏足跡の年代と、Jkm における“Medhaṅkara”の年代とに相違があるため、当該の詩句に登場する“Medhaṅkara”が仏足跡をもたらしたのかどうかは疑わしい［Cf. Hazra1981. pp.159ff.］。しかしながら、この詩句に述べられている“Medhaṅkara”ら大長老のスリランカ訪問が、“Dhammagambhīra”ら 33 名の大長老らによるスリランカ渡航のこととは別のことと解釈しうる可能性を提示するものとして、N.A.Jayawickrama の註記は注目に値すると思う。スリランカへの渡航が然程困難ではなくなった A.D.15c に、生涯において複数回スリランカへ出掛けた僧もいたであろう。

〈キーワード〉Wat Pā Däng 派、Wat Suan Dòk 派、*Mūlasāsanā*、*Jinakālamālī*、Mahāñāṇagambhīra